

オレゴンの旅

清水 建美

T. Shimizu: A botanical trip to Oregon, U.S.A.

昨年の8月中旬、数日間のロッキーの探索の後、コロラド州デンバーからロッキーを越えて西にオレゴン州ポートランドへと飛んだ。デンバーの町は緑はすべて人工的に育て上げられた事実に象徴されるように、アメリカ合衆国の西部は東部のアパラチアとは大ちがい、乾燥気候下にある。眼下に見下ろす風景は、コロラド・ワイオミング・アイダホ・オレゴンとはぼ2時間の間、高地や谷筋に散見する針葉樹林を除けば、ほとんど茶褐色の連続であった。

合衆国地理学会発行の潜在自然植生図によると、このルートには、Western spruce-fir forest (西部トウヒ・シラベ林)のほかは、Sagebrush steppe (ヨモギ・カモジグサ草原)が大部分、ところどころにSaltbush-greasewood (ハマアカザ・サルコバトス叢林)や砂漠が散在する。机上からでは、不毛の地の連続とうつつはずである。こんな乾ききったところに、オレゴンシモツケソウ (新称) *Filipendula occidentalis* や有名な日米共通植物のモミジカラマツ・ナンブソウ・ハリブキ・イワイチョウはあるはずはない—とぼんやり考えていたら、すでに着陸体勢に入った機体の直下に、さくくて折り重なった氷河が突然迫ってきた。カスケードの盟峰フッド山 (標高約3700m) である。みれば、もはやそこには芒漠たる光景はなく、黒々とした樹海が一面にひろがっていた。それは、実に見事な針葉樹林であり、落葉樹は1本もみることができない—そんな感じの樹海であった。

右手の窓からは、セント・ヘレンズ山の黒煙が望見された。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

何年も以前に、私はバラ科のシモツケソウ属 *Filipendula* を調べたことがある。それによると、シモツケソウ属は世界に16種があるが、そのうち12種が日華区系にあって東アジアは分布の中心になっている。ところが、2種が北アメリカに分布する。一つは、太平洋側のアパラチア北部にあるアメリカシモツケソウ (新称) *F. rubra*, 他の一つがオレゴン州の海岸山脈に局在するオレゴンシモツケソウである。

ところで、アメリカシモツケソウは、日本の

シモツケソウやキョウガノコに近く同じ節に分類されるのに対し、オレゴンシモツケソウは子房は上位的、果実は両端に細長くのび、がく裂片が花後に伸長するなど、特異な性質をもっている。この1種のために亜属を提案した。子房のつき方や果実の形から、シモツケソウ属の中で最も原始的な種類と考えたのである。そんな事情もあって、私は機会があれば、シモツケソウ属の原型ともいべきオレゴンシモツケソウをぜひとも自生地において検分したいものと思っていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

8月12日、自動車工場の技師というジョージ・ルイス氏とともに、ポートランドから西へティラムークへと車を駆った。氏は、この地方の植物愛好者の一人でとくに海岸山脈の植物に詳しいという。地元の愛好者が郷土の植物分布状況に強いのはアメリカでも同じ、オレゴンシモツケソウの案内を買って出てくれたのである。

ティラムークは大平洋の岸辺にある小さな田舎町、ポートランドからは1000mほどの海岸山脈を越えることになる。途上の植生は、アメリカトガサワラ (オレゴン・パインまたはダグラス・ファー) *Pseudotsuga menziesii*, アメリカツグ *Tsuga heterophylla* を主とした針葉樹林で、林下には、クジャクシダ・リンネソウ・スノキ・ヨウラクツツジ・ルイヨウショウマ・ハリブキなど、日本産と同じかよく似たものばかりである。枝も葉もほこりをかぶってすべてが白っぽくなっているのが、採集者にとってはいいまい。セントヘレンズからの火山灰だという。標高1000mそこそこの分水嶺からは、林の展



写真1 海岸山脈をおおう見渡す限りの針葉樹林

望は見事である(写真1)。見渡す限りの針葉樹林は見事ではあるが、しかし、どうしてもこれは原生林には見えない。全体に林は若く、立枯れ木すら混っている。ルウィス氏は、尾根に立つ案内板を示した(写真2)。それによると、1933年にアメリカ最悪の山火事が発生し、240000エーカー(97000 ha)を

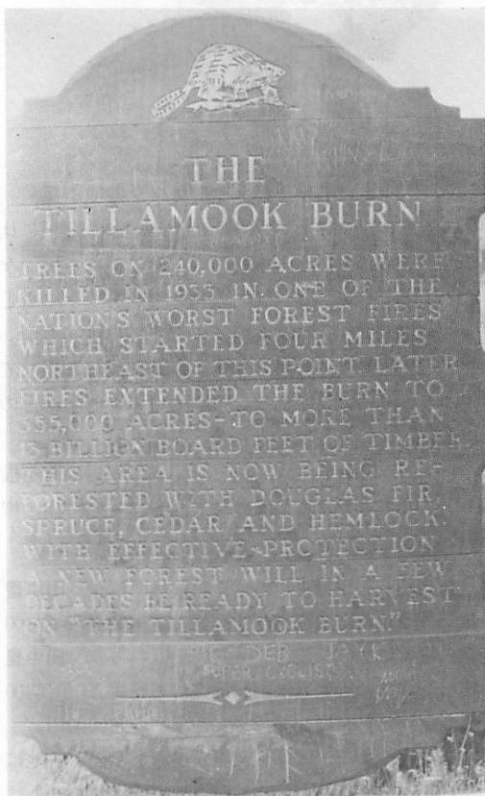


写真2 ティラムークの大火を示す説明板

まず焼き、ついには355000エーカー(143000ha)を焼失して、木材の損害は130億立方フィートに及んだという。眼前の林は、その後に天然更新によって復活したものの、樹令はせいぜい50年ということになる。みられる樹種は、アメリカトガサワラが最も多く、アメリカトウヒ *Picea sitchensis*、ニオイヒバ *Thuja occidentalis*、アメリカツガである。ルウィス氏は、これらの樹種を遠方から鑑別する方法を教えてくれた。なるほど、アメリカツガの梢の先はたれ下るが、他のものはそうではな



写真3 (左)アメリカトガサワラ (中央)アメリカツガ (右)アメリカトウヒ
い(写真3)。枝葉ばかりでなく、全体をみることの重要性をこでも教えられた。

ともかく、アメリカの西部は乾燥しがち、山火事の多いことは世界有数である。山火事防止が自然保護の重要な側面であるというのうなづける。それにしても、林の焼失後、地下部全体が焼けるわけではなく、マツ類やカバ類に妨害されるわけでもなく、そっくり再生してくるというのはうらやましい。アメリカの林業は天然更新を待てばよいのだから、きわめて経済的であるにちがいない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

分水嶺を大平洋側へと下ると、ルウィス氏は迷うことなくウィルソン川の一角に私を案内した。その一角は、水が断え間なくしたたり落ちる川沿いの苔むした日陰の岩壁であった。岩壁の上には、アメリカトガサワラやアメリカツガの林、岩壁のふちはハンノキやヤナギなどの低木がしげり、岩面にはコケのほかにはクジャクシダやキイチゴの1種が散在するだけで、まるで土がない。そこに、火山灰をかぶった一群のオレゴンシモツケソウがあった。



写真4 岩壁に群生するオレゴンシモツケソウ

すぐ附近に散在するいくつかの小集団を含めて、地上茎の数は30~40本というところであろうか。川に沿って巾30m程度のこの岩壁を離れると、もはや1本もみつからない。聞けば、ほかには一つ南を流れるトラスク川沿いの数個所にみられるにすぎないという。国際自然保護連合植物保護委員会は、自然保護上世界の要注意植物のリスト——レッド・データー・ブッカーの作成を急いでいるが、そのデーター集のファイルの中にオレゴンシモツケソウがあったのを思い出した。世界的な貴重品なのである。

残念なことに花はすでに終わり、白い花びらの残骸が水にうたれて花序にへばりついており、しかも、果実は未熟であったので、蕾の固定あるいは種子や花の標本採集とはいかなかった。しかし、オレゴンシモツケソウの特異性が地下部にもあることを知ることができた。驚いたことに、地下茎はコケに包まれて岩面を分枝しながら長々と這っているのである。土中になく岩上にあるので、正しくは匍匐茎というべきかもしれない。しかも、それは完全に木質化しているのである。つまり、オレゴンシモツケソウは木というべきかもしれない。こんなシモツケソウ類はほかにはないだろう。ヨーロッパ

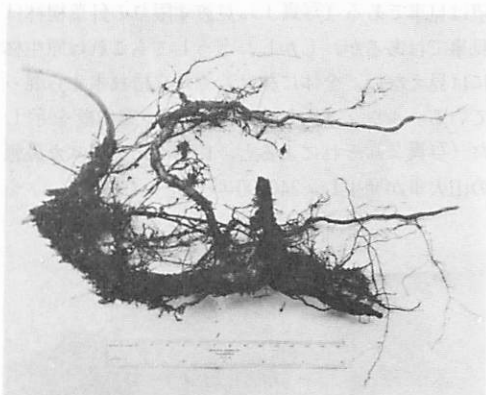


写真5 オレゴンシモツケソウの地下茎

のロクベンシモツケソウ *F. hexapetala* の塊根に比すべき特異さというべきだろう。ロクベンシモツケソウは花の形態からは最も進化したシモツケソウと考えられ乾燥への適応の結果として塊根をもつ。オレゴンシモツケソウの木化した地下茎は、果して原始的な花や局限された分布圏といった側面とどのような関係があるのだろうか。

ルウィス氏の車は、やがてティラムークの町を横断し、私は遂にアメリカ合衆国西海岸—大太平洋の岸辺に立った。

〔新刊紹介〕金井弘夫（編）「日本地名索引 上（五十音編）下（字画編）」B 5 判653頁および1565頁、アボック社発行（1981年）、1セット60,000円。

植物の分布を調べようとするとき、標本や文献に記された地名の所在をつきとめるのに時間を空費した経験は、誰でも持つだろう。国立科博の研究室長であり本会会員でもある金井博士がこの悩み解消をめざし、10年の歳月をかけて国土地理院発行の20万分の1の地図上すべての地名 124,578個をひろい上げ、全国ブロック別の五十音索引を完成されたのは5年ほど前のことであった。われわれの「長野県植物誌」の産地表示はすでにこの金井方式に従って進められているが、この索引が表記2冊の本として装いを新たにこのほど出版された。下巻は、地名の読み方を知らなくても引き出せる字画索引であり、至って便利である。基本資料であるだけに、極めて地味な出版物ではあるが、その用途は限りなく広い。3月20日付の「朝日新聞」および3月21日付の同「天声人語」で報道されたが、この地道な仕事を全うされた博士のねばりには敬意を表したい。信州大学の中央図書館は、発行と同時に購入した。高価な本なので個人所有は困難だが、図書館や研究室にはぜひともそなえておきたい。

（T. S. 生）

〔新刊紹介〕佐野泰（監修）亀山章（解説）田中豊雄（写真）「長野県園芸植物図鑑 庭木編」B 6 判300頁、塚本洋太郎（監修）佐野泰（解説・写真）田中豊雄（写真）「長野県園芸植物図鑑 草花編」B 6 判300頁。信濃毎日新聞社発行（1979年）各 2,000円。

第33回やまびこ国体の会場を中心として、各地に花だん作りが行なわれ、鉢植えがかざられたことは有名である。花いっぱい発祥の地、長野県でなければのアイデアであった。信州人は花好きである。

近ごろ花屋や種苗店へ出かけると美しい鉢物や切り花が、また美しく印刷された種子の袋入りが並べられている。ところが花屋にたずねても正確な名前を教えてくれるものではなく、高山植物の聞いたことのあるような名前を教えてくれることがしばしばである。種子を買い求めても充分育てられないことが、ときどきある。

こんな欲求不満を満たしてくれるのが本書2冊である。すばらしいカラー写真と共に解説が行き届いている。原産地、形態、性質、開花期、利用の仕方、似た種類の概要を述べ、次に「栽培」の項目がある。これによって我々は正しい名を知り、本書片手に花づくり、庭木作りをすることができる。何も「長野県……」にこだわる必要はない。

（山猿）